柳 哲雄先生の死を悼む

（特非）瀬戸内海研究会議 前理事長※
日 高 健

7 月 2 日に、瀬戸内海研究会議前理事長で九州大学名誉教授の柳哲雄先生がお亡くなりになりました。全く突然のご逝去は、瀬戸内海研究会議にとって、そして里海や沿岸域の環境管理に関する研究を行う者にとって極めて大きな打撃です。

柳先生は、言わずと知れた里海概念の生みの親であり、育ての親でもあります。単なる地理的な呼称に過ぎなかった里海を、沿岸域を管理するための概念と知識体系ならびに運動論としての里海に変えていきました。今では国や地方の沿岸域政策や市民活動として取り上げられるだけでなく、日本発のアイディア Satoumi として世界的にも使われるようになりました。瀬戸内海との関わりも深く、里海概念の発祥の地とされる岡山の日生を抱えるだけでなく、瀬戸内環境保全特別措置法による瀬戸内海管理の旗印にも使われるようになりました。栄養塩を単に削減するのではなく、適切に管理するという栄養塩管理は、まさに里海の考え方であります。

柳先生による里海概念の面白さは、その射程の広さにあると思います。有名な里海の定義は「人手が加わることにより、生産性と生物多様性が高くなった沿岸海域」という生態学的な側面からのものであるが、同時に「太く、長く、滑らかな物質循環」が不可欠であるとして物質循環を重要視し、さらに沿岸地域の文化や経済活動、それに社会制度のような社会文化的な側面も視野に入っています。柳先生は、これらの各側面をご自身で追及すると同時に、各分野の専門家を巻き込んで専門的な検討もしていました。ご自身の関心の広さは、『里海論』(2006)、『里海創生論』(2010)の構成でよくわかるように、特に前者では著名な定義が提起されるとともに、藻場や漁場の造成、漁業資源管理や養殖にも触れており、漁業への関心が高かったことも示されています。

各分野の専門家を巻き込んだ研究で代表的なものは、2015 年から行われた環境省の環境研究総合推進費(S13)による研究で、その成果は『里海管理論』(2019)にまとめられています。この中で栄養塩管理が重要な研究項目として取り上げられるとともに、専門分野を超えた連携による学際的な沿岸域管理の可能性が追求されました。最近では、現場に入り込んだ研究者の役割にも言及し、研究者と実務家が連携して研究を行い、解決策を探る超学際的研究にも深く関心を持っておられました。残念ながら、この路線を柳先生自身がけん引することはできなくなりました。

柳先生は、びっくりするくらい幅広い人脈を国内だけでなく海外にも持っておられました。その成果が上で述べた幅広い射程と各分野の専門家を巻き込んだ研究を生んでおり、世界的なSatoumiの普及にもつながっています。お弟子さんも非常に多い。私は、時々「お前は弟子を作っていないからだめだ。弟子を育てろ。」と叱責されました。見た目はとっつきにくいのに、なぜあんなに人脈が広いのでしょうか。柳先生の単刀直入で歯に衣着せぬ物言いに、会議やシンポジウムの場で触れたことのある方も多いと思います。それは対象に対して真摯に向かい合う結果の厳しさであったのだと思います。その一方で、どこに行くにも、例えば10日間の海外旅行でもリュックサック一つで行くような気さくさをお持ちであり、人への思いやりも深くありました。この側面は、『退職老人日記』(2020)、『続退職老人』(2022)をお読みになるとよくわかります。厳しさと優しさの両面をお持ちであったのが、柳先生の人間としての魅力であったように思います。

柳哲雄先生が敷かれた研究路線を引き継ぎ、我々なりに発展させていくのが、残された我々の使命であります。ご冥福を心からお祈りいたします。

※日高 健氏は令和4年7月～8月まで(特非)瀬戸内海研究会議 理事長を務められました。なお、後任には松田 治氏がご就任されました。